

100年経ても ゆるがぬ機能

世界的な大事業

小樽市在住の小説家、蜂谷涼さん（40）に、小樽港防波堤建設を題材にした著書「海明け」（昨年8月・講談社刊）がある。フィクションでありながら、困難を極めた防波堤建設やそれに携わった人々、当時の小樽の世相を描き、「小樽再発見」の貴重な資料ともなっている。

蜂谷さんは小樽生まれ。東京でテレビ番組の企画やコピー作りに携わる傍ら文筆活動を続け、90年「銀の針」で第11回読売ヒューマン・ドキュメンタリー大賞の佳作を受賞。小説では94年「分別回収」で文学界新人賞候補に、96年「煌浪の岸」で小説新潮長編新人賞候補となった。

7年前、小樽に戻ってから「以前と違った視点で小樽を見つめたい」と題材を考えた。高台にある自宅から毎日、港と防波堤を見るうち「グローバルという言葉がない時代、世界に冠たる防波堤建設は、まさにグローバルで壮大な事業だった」と、小説のテーマに取り上げた。

資料の収集から書き上げるまで約1年。物語は明治・大正時代の小樽を舞台に、独立心旺盛な女性が逆境に負けずに道を切り開き、その過程で防波堤建設の指揮を執っていた幹部と恋心を抱きあうストーリー。当時の小樽の繁栄ぶり